shiseido art egg 16th

サカサゴト　岡 ともみ
Sakasagoto　Tomomi Oka
-Inverted Ordinary Life-

「shiseido art egg」は、「新しい美の発見と創造」という考えのもと、オープン以来100年以上にわたり活動を継続してきた資生堂ギャラリーの門戸を新進アーティストに開く公募制のプログラムです。16回目となる今回は、全国各地より260件の応募をいただきました。今回も資生堂ギャラリーの空間を活かした独創的な展示プランが多く提案されましたが、選考の結果、独自の視点から今日の世界の新しい価値観や美意識を表現する、岡 ともみ（おか ともみ）、YU SORA（ゆ そら）、佐藤 壮馬（さとう そうま）が入選し、それぞれの個展を１月～５月にかけて開催します。

第１期に展示する岡は、個人の大切な思い出や消えかかっている風習など、見過ごされがちな小さな物語を封入した装置を作り、記憶を空間に立ち上げることを試みています。

「サカサゴト」解説

縄文時代の日本では、あの世はこの世のあべこべである、と信じられていた。こちらが夕ならあちらは朝、こちらが夜ならあちらは昼。着物はこちらが右前に着るならあちらは左前。このような考え方は、現在でも「サカサゴト」と呼ばれ、死人が出た際には日常の様々な動作を逆に行うという風習として、日本各地に残っている。展示室では、まさに「サカサゴト」のように、本物の時計の盤面は反転し、逆回転している。そんな古時計が反転する時、忘れ去られようとしている葬送の風習を思い出すように、内部の映像が再生される。自身も忘れ去られようとしている古時計は、忘れ去られた風習の墓跡のようにそこに立ち、あの世とこの世の境目を曖昧なものにしている。

岡は、自身の祖父の死に際して、棺に青い紫陽花を手向け、火葬の終わった遺骨が薄青に美しく染まっていたことから、青い紫陽花を手向けたことが、自分にとっての祖父を送る儀式であったと考えるようになった。かつて日本にあった葬送の風習を調べていくと、死者があの世への道で迷わないように、とか、魂の依代になるように、など、小さいコミュニティや人がかけた思いがそれぞれにあることがわかる。本来、死や、あの世と向き合う姿勢は、このような小さな願いや死者への慮りから出発したものが多かったのであろう。日本各地に残る、今や消えようとしている葬送の風習やあの世の見方を再度見ていくことで、形骸化しつつある葬送の形や、死との向き合い方を再考する。

岡 ともみ

2019年　ベルリン芸術大学留学
2022年　東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻修士課程修了
現在同科博士後期課程在学

主な展覧会
2018年・2019年　「オープン・スペース」（インターコミュニケーションセンターICC、東京）参加
2019年　個展「どこにもいけないドア」（art space kimura ASK?P、東京）
2022年　個展「誰そ彼時の部屋」（art space kimura ASK?P、東京）

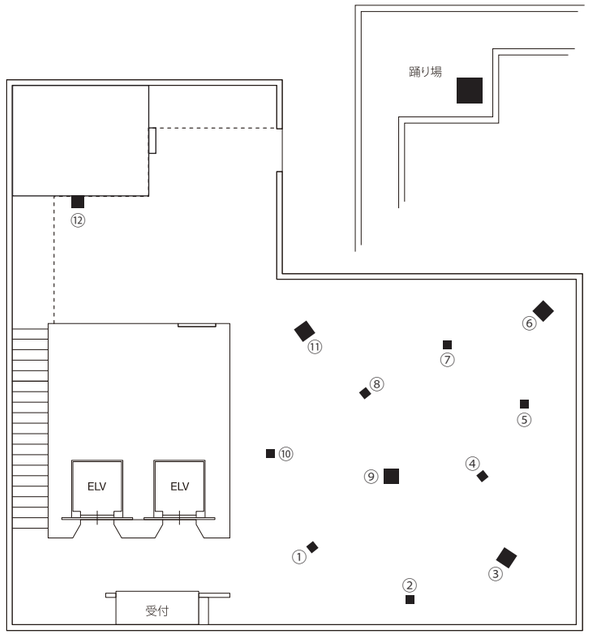
SHISEIDO GALLERY

会期：2023 年 1 月 24 日（火）– 2 月 26 日（日）
平日：11：00–19：00　日・祝：11：00–18：00
毎週月曜休（月曜日が祝日にあたる場合も休廊）

主催：株式会社 資生堂
助成：公益財団法人クマ財団、
公益財団法人野村財団（岡 ともみ展）

※新型コロナウイルスの感染状況により、スケジュールおよび内容に一部変更が生じる場合があります

《サカサゴト》2022　古時計、映像　インスタレーション
技術協力：tettou771
サウンド：小林有毅
制作協力：遠藤純一郎



① 火
喪のある家の火は悪くなると言われ、その火で煙草を吸ったり、煮炊きしたものを食べると忌の影響が及ぶと言われている。喪の家に出入りした者が病気になるとこれを火負けと言い、治すためのさまざまな呪法がある。棺のしめ縄の一部を黒焼きにしておくなどもその一つである。

② 影
影隠しとは葬式の別名で、仮埋葬のことを指す地域もある。影とは本体そのものではない、身代わり、存在を暗示するものとして扱われ、影を隠す、とは姿を消すことである。

③ 舟
日本では、かつて室町時代に疫病の死者を京都の賀茂川に流したとか、鳥取県ではわい温泉の東郷池に、火葬の骨や灰を投げ込む風習があったと伝えられている。また、今日でも、棺のことを一般にフネとよんだり、入棺のことをオフネイリとよんだりするし、また志摩半島では棺のことをノリフネといい、常陸(ひたち)の海辺では葬儀の世話役のことをフナウドというなど、舟葬の痕跡を物語ると思われる材料がいくつか残っている。

④ 二人遣い
死人が出た時の初めの手続きは親戚への飛脚を立てることであるが、日本各地でその名称を変えているものの、遣いは二人ひと組でなければならないという風習が数多く見られる。理由は定かではないが、ひとりで行くと死人が後からついてくるためとか、忌の力に対抗するためなどと言われている。各地で遣いに行くものの衣装や、行った先で食事をせねばならぬ、寄り道をしてはならぬ、日中でも提灯の火を点けて行くなどの決まりごとが存在する。

⑤ 風車
青森県の昭和大仏青龍寺や埼玉県の地蔵寺など、水子供養の寺では亡くなった子どもへの供物として風車が有名であり、境内にはたくさんの風車が回っている。風車の羽には南無・阿弥・陀・仏と一枚ずつに念が込められている。

⑥ 電話
電話での呼びかけの「もしもし」とは、妖怪が人に声をかけるときには「もし」と声をかけてきて、それに返事をすると魂を取られるという言い伝えがあったため、自分が妖怪や幽霊ではないと証明するために「もしもし」と2回呼ぶようになったという説がある。また、エジソンは生涯を通して霊界とのコミュニケーションに関心をもち、晩年には霊界通信装置「スピリットフォン」の開発に心血を注いだと言われる。電子音声現象（EVP）は、1900年代から電子機器等により死後世界との交信を試みる死後意識存続研究である。霊界との接続手段として、音声通信、つまり電話様の機器が数多く試みられていた。

⑦ 回廊　合わせ鏡
合わせ鏡は悪魔を呼ぶとか、未来の自分、転じて死に顔が映るといった都市伝説が多数存在する。江戸川乱歩の小説「鏡地獄」では、内部が全面鏡張りになった球形の部屋に入った男が「その内部の凄まじい光景」によって発狂する。

⑧ さかさ屏風　さかさまの幽霊
さかさ屏風とは、故人のまくらもとに屏風をさかさに置く仏教の死後の儀式のひとつである。あの世はこの世のさかさまという考えから、あの世に合わせて屏風もさかさにする。また、浮世絵にはさかさまに描かれた幽霊が多数登場する。幽霊の姿がまだ確立されていないころ、通常ではない、ということを示すためにさかさに描いていたものである。

⑨ 水鏡
池や川に姿を映す水鏡は、未来の姿が映るという言い伝えが多い。未来の姿が転じて、自分が映らないときには死を暗示したり、死の運命が映ったりするという話も多い。

⑩ 一本花
新亡者の枕元に一本だけ花を供える風習が日本各地に残っている。一本であるのは、葬儀までの死者の魂の依代とするためである。この一本花はまた、葬列にも加わって墓まで持っていかれた。持つひとの数が増えると、花の本数ではなく種類を増やすしきたりがある。

⑪ 道燈籠
葬列の道中、道の両脇に刺した燈籠。竹を細く割り、その上に木の葉と蝋燭をのせた。複数の道が交差する辻々を六道の別れ道に見立て、葬列が迷わないように立てるのである。

⑫ 青い紫陽花
作者の祖父が亡くなった際、棺に青い紫陽花を手向け、火葬の終わった遺骨が薄青に染まっていたことから、作者にとって祖父の死と弔いの象徴になっている。青い紫陽花が白くなる様子は、遺骨に青の色が移ったことと、釈迦が入滅した際、沙羅双樹の花の色が悲しみで白くなった言い伝えから。時計内部に組まれたセットはあじさい寺としても名高い鎌倉の明月院をモチーフとしている。